ALTI
弦楽シリーズ

新進気鋭の若手演奏家3名による
渾身のプログラム

Piano Trio Vol.3
ピアノトリオ

2022 12/10 (土) 14:00 開演 13:30 開場

京都府立府民ホール“アルティ”

主催：京都府、創＜公益財団法人京都文化財団・株式会社コングレ共同事業体＞【京都府舞台芸術振興・次世代体験推進事業】
助成：公益財団法人 ロームミュージックファンデーション　協力：日本音楽財団（日本財団助成事業）

文化庁 京都へ　Rohm Music Foundation ロームミュージックファンデーション　AFF2 ARTS for the future! ▶2

Program

F.J. ハイドン：ピアノ・トリオ 第25番『ジプシー』
ト長調 Hob.XV:25

Franz Joseph Haydn / Piano Trio in G major, Hob.XV:25 "Gypsy"

Ⅰ. Andante
Ⅱ. Poco Adagio
Ⅲ. Finale: Rondo All' ongarese. Presto

L.v. ベートーヴェン：ピアノ・トリオ 第25番『幽霊』
ニ長調 Op.70-1

Ludwig van Beethoven / Piano Trio in D major, Op.70 No.1 "Ghost"

Ⅰ. Allegro vivace e con brio
Ⅱ. Largo assai ed espressivo
Ⅲ. Presto

休 憩

J. ブラームス：ピアノ・トリオ 第1番 ロ長調 Op.8

Johannes Brahms / Piano Trio No.1 in B major, Op.8

Ⅰ. Allegro con brio
Ⅱ. Scherzo. Allegro molto
Ⅲ. Adagio
Ⅳ. Finale: Allegro

Profile

©Ikuo Hiramatsu

黒川 侑（ヴァイオリン） *Yu Kurokawa*

京都市出身。第75回日本音楽コンクール第１位、岩谷賞（聴衆賞）他３つの特別賞を受賞。第６回仙台国際音楽コンクールで聴衆賞受賞。スイス・ロマンド管弦楽団、スペイン国立管弦楽団、プラハ室内管弦楽団、東京フィル、新日本フィル、京響など国内外の主要オーケストラと共演する他、リサイタル、室内楽でも好評を博す。また京都府文化賞奨励賞、京都市芸術新人賞、青山音楽賞、出光音楽賞などその演奏活動への受賞も多い。京都市交響楽団との演奏がCD「名曲ライブシリーズ」に収録されている他、「クラシック倶楽部」「題名のない音楽会」等メディア出演も多数。ウィーン、ブリュッセルで研鑽を積んだ後、桐朋学園大学院大学、エコール・ノルマル音楽院高等課程修了。京都市立芸術大学非常勤講師。使用楽器は、個人より貸与されているAntonio Guarneri del Gesu (1742)。

©ヒダキトモコ

佐藤 晴真（チェロ） *Haruma Sato*

2019年、ミュンヘン国際音楽コンクール チェロ部門において日本人として初めて優勝。18年にはルトスワフスキ国際チェロ・コンクール第１位および特別賞を受賞。第83回日本音楽コンクール チェロ部門第1位および徳永賞・黒柳賞など受賞多数。国内外の主要オーケストラと共演しており、リサイタル、室内楽でも好評を博している。20年には、名門ドイツ・グラモフォンよりデビューアルバムとなる『The Senses ～ブラームス作品集～』、21年には『SOUVENIR ～ドビュッシー&フランク作品集』をリリース。第18回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第30回出光音楽賞、第32回日本製鉄音楽賞受賞。21年度文化庁長官表彰（国際芸術部門）。現在、ベルリン芸術大学在学中。使用楽器は宗次コレクション貸与のE.ロッカ1903年。

©HIDEKI NAMAI

阪田 知樹（ピアノ） *Tomoki Sakata*

2016年フランツ・リスト国際ピアノコンクール第１位、６つの特別賞。2021年エリザベート王妃国際音楽コンクール第４位入賞。東京芸術大学を経て、ハノーファー音楽演劇大学大学院ソリスト課程に在籍。第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにて弱冠19歳で最年少入賞。ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、聴衆賞等５つの特別賞、クリーヴランド国際ピアノコンクールにてモーツァルト演奏における特別賞、キッシンジャー国際ピアノオリンピックでは日本人初となる第１位及び聴衆賞。国内はもとより、世界各地20カ国で演奏を重ね、国際音楽祭への出演多数。2015年CDデビュー、2020年3月、世界初録音を含む意欲的な編曲作品アルバムをリリース。内外でのテレビ・ラジオ等メディア出演も多い。2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞受賞。

Program Notes

本日は、今回で３回目となるピアノトリオ公演にお越しくださってありがとうございます。

今回のプログラムは、これまでの２回の公演とは趣を変え、いわゆる「名曲」と呼ばれるにふさわしい３曲をお聴きいただきます。現在の「室内楽」の概念が芽吹いた時代を生きたハイドン、その後新しい境地を開き続けたベートーヴェン、古典派の巨人たちの後どう作曲するかを模索したブラームス。３人による、60年ほどのうちに作曲された３つのトリオですが、それぞれに方向性の異なる音楽が息づいています。これまでの、ラフマニノフのトリオや世の終わりのための四重奏曲をはじめとする３人の「初めてやってみたい」曲を中心に組んだプログラムとはまた違う、室内楽にもう一歩踏み込んだ世界に焦点を当てていくことができたらと思っています。

思えば、最初は１度きりと思っていたトリオで、これほど色々なプログラムを演奏できてきたことは心からの喜びです。余談ながら、今回の公演のフライヤーは、アルティの方が色々な方に手にとっていただけるようにと、表面と裏面で別々のコンセプトのデザインにまとめてくださいました。本日の公演も、そのように色々な方に楽しんでいただけるものになれば、そんなに嬉しいことはありません。

黒川　侑

F.J. ハイドン：ピアノ・トリオ 第25番『ジプシー』ト長調 Hob.XV:25

F.J. Haydn: Piano Trio in G major, Hob.XV:25 “Gipsy”

I. Andante
II. Poco Adagio
III. Finale: Rondo all'ongarese. Presto

ハイドンの700曲を超える作品の中で、実はピアノトリオの分野は交響曲、弦楽四重奏曲に次ぐ多作の作品群のひとつにあたる。ハイドンにとってピアノトリオの作曲は、交響曲のように大衆に向けた意識を持ったり、弦楽四重奏曲のように様式を突き詰める必要なく、当時「最良のアマチュア演奏家／聴衆」であった貴族の、多くは仲間内で演奏することを目的とした、演奏者の純粋な喜びのためのものであったという（当時はアマチュアとプロの差もあまりなかった）。ハイドンはこのジプシートリオを含む多くのピアノトリオを６０歳前後の円熟の時期に作曲しているが、中にはこの時代の作品とは思えないような斬新で自由なものもあり、ハイドンの音楽に対する楽しみと、ピアノトリオ作曲に対する熱が伺える。

ハイドンの曲の魅力は、どんな不穏な時でも失われないように見える礼節、その中に現れる伸びやかな喜び、のようなところではないかと思うが、数あるハイドンのピアノトリオの中でも、この曲では特に端正な表情が消えることがない。とはいえその中で、１楽章の中に現れる急な短調や、３楽章の「ジプシー風ロンド」（曲名の由来。ハイドンは生涯の大半をハンガリーのエステルハージ家の楽長として過ごし、定期的にジプシー／ハンガリーの民族音楽に触れる機会があった）に組み込まれたジプシー音楽は、チェロの心地よい支えとともに、曲を華やかに彩っている。

60歳を超えたハイドンの熟練したこういった音楽を、公にならない自分たちだけの楽しみとして演奏し聴くことができた当時の貴族たちは、どれだけ幸せだったことだろうか。

L.v. ベートーヴェン：ピアノ・トリオ 第５番『幽霊』ニ長調 Op.70 No.1

L.v. Beethoven: Piano Trio in D major, Op.70 No.1 “Ghost”

I. Allegro vivace e con brio
II. Largo assai ed espressivo
III. Presto

表題である「幽霊」は、ベートーヴェンの弟子であるツェルニーの、「この楽章（第２楽章）を聞いて、ハムレットでの幽霊の初登場を感じた」との言によるもの。ベートーヴェンによって名付けられているものではないにせよ、明朗な力に満ちた１,３楽章で

はなく、2楽章の印象をもとに名付けられた曲名が今に至るまで根付いていることは面白い。確かに、「運命」「田園」「皇帝」をはじめとする、傑作の森と呼ばれるベートーヴェンの中期作品の間に作曲されたこの作品でありながら、2楽章のある種不可解なピアノのトレモロや各々の旋律の重なりは、どこかベートーヴェンの超越した後期作品に足を踏み入れたような、特徴的な雰囲気を醸している。3楽章冒頭でそれは「風が雲を追い払うように」消え去るにせよ、これがこの曲の大きな魅力を担う楽章であることは間違いないと思う。

1楽章では、テーマをきっぱりと言い切るベートーヴェンらしい冒頭が、E.T.A. ホフマンの言う「銀色の小川」のように途切れることなく楽章の中に現れる。「ハイドンやベートーヴェンにおいて、個性化はテーマの独創性というより特殊な形式構想に根拠を持つ」と言われるが、そういったことも感じられるだろうか？輝かしい3楽章と共に、実際の演奏時間としても最も長くなる上述の2楽章を挟んで、明快な土台を作っているようだ。

この曲は当時ベートーヴェンを援助し、ピアノを巧みに演奏した伯爵夫人に捧げられたものではあるものの、技巧的な要求も高い作品であり、また弦楽器も、それまでの時代のようにピアノの「伴奏」として扱われることなく、3つの楽器が対等に語り、積み重なっている。ベートーヴェンが自身の作品1として最初に発表したのもピアノトリオであったが、それもそれまでの、既存のピアノトリオという形式を変革することができるという意識があったからかもしれない。

J. ブラームス：ピアノ・トリオ 第1番 ロ長調 Op.8

J. Brahms: Piano Trio No.1 in B major, Op.8

I. Allegro con brio
II. Scherzo. Allegro molto
III. Adagio
IV. Finale: Allegro

この曲はブラームスが弱冠21歳の時に作曲されたものだが、この作品からは若年のブラームスの、したたるような情熱を感じないわけにはいかないと思う。特にヴァイオリン奏者にとっては、触れる機会の多い3つのヴァイオリン・ソナタやヴァイオリン協奏曲のような作品が、既にブラームスが40代半ばを過ぎてからの「秋」に例えられるような世界観が漂うものが多いということもあり、古典派の音楽を崇拝し続けたというブラームスの出発点がこのようなロマンティシズムであるのは、いつも何か感慨深いものを感じてしまう。

既にショパン、リスト、ワーグナーといった作曲家が存在したいわゆる「ロマン派」の時代の中で、この曲もどちらかといえば芸術的到達と同時に、個人的な心情を歌うことにも軸足を置いているように感じる。「波の上に虹がかかり、岸には蝶が舞い、夜鶯の声を伴奏とする」と言われる主題に始まり、その主題を元にする2楽章のスケルツォ、霊感に満ちた3楽章、短調で劇的に幕を下ろす最終楽章。時に交響曲としても通用するのではないかと思うほどの分厚い響きは、そのまま若いブラームスの一面を映しているのかもしれない。ブラームスは晩年にこの作品に改訂を加えており、本日演奏するのもそちらの最終版であるが、それでもどこか、ベートーヴェンやシューベルト、そしてブラームスに熱烈な援助を授けたロベルト・シューマンら先達の直接の影響も香ってくるように思う(実際、初版にはベートーヴェン、シューベルトらの歌曲の引用が見られる)。

ロベルトとブラームスの密接な関わりは有名な話だが、ブラームスがエッセイ“新しい道”において「時代の最高の表現を理想的な仕方で表明するように天職づけられている」とロベルトから手放しの称賛を受け音楽家としての注目を集めたのは、この作品に取り掛かるすぐ前のことである。それはその妻クララ・シューマンとの、生涯にわたっての深い関わりの始まりの時期でもあった。そしてブラームスにその後間接的にも暗い影を投げかけることになる、ロベルトの精神の疾患による自殺の試みは、この作品完成の一ヶ月後のことだ（ブラームスはそれから二年ほど、新たな作品を発表できていない)。

そのような激動の時期の作品の30年を経ての改訂は、ブラームスの頭にどういったものがよぎっただろう。ブラームス自身による改訂作品のうち、この曲のように初版も破棄されずに残っているのは、非常に珍しいということだ。

（黒川　侑）

チケット料金がお得です！

アルティメイト会員募集中！

年会費 1,500円（入会金不要）

特典1 ホール主催公演のチケット割引・優先予約

特典2 催物案内を毎月無料でお届け

特典3 ホール近隣提携ホテル内飲食店でのご優待 *and more!*

詳しくはアルティ事務所またはウェブサイトにてご確認ください。 *http://www.alti.org.mate*

http://www.alti.org

@ALTI_ARTLIVETHEATER

アルティ・インターネットチケットサービス

TICKET

http://www.alti.org/

24時間チケット購入可能

京都府立府民ホール“アルティ” *TEL 075-441-1414*

〒602-0912 京都市上京区龍前町590-1 9時～18時／休館日：第1・3月曜（祝日の場合は翌日休館）